

## 論説

## パラダイム転換論の諸論点

小野坂

弘

## はじめに

トーマス・クーンのいう「パラダイム転換」が犯罪学・刑事政策、そして法学においてあったか否かに関しては、いまだに決着がつかっていない。しかしながら、いずれの分野においても、決定的といえる考え方の転換が起きていることは誰も否定できないであろう。そのような転換を「パラダイム転換」と呼ぶか否かは、論者の視点がどこにあるかによる。そして、このような転換を引き起こしたのは、それぞれの分野における考察対象が第二次大戦後に被った重大な変化であったのである。本稿はこのような問題意識の下に、「パラダイム転換論」の諸論点について

検討する。

## I パラダイム論について

一 クーンの『科学革命の構造』（以下では『構造』で引用）初版の出版は一九六二年である。この本は我が国では一九七〇年に中山茂によって翻訳されるが、そこには原著第二版にある「補章——一九六九年」が入っている。まず最初にクーンの「パラダイム」論について後の叙述に必要な範囲で、簡単に整理しよう。クーンの『構造』のもっともユニークな点は「科学革命」の分析ではなく、「通常科学」の分析にある。<sup>(2)</sup> この分析は多くの批判にもかかわらず、妥当なものであり、クーン自身が述べていない、重大な意義をも持つ。<sup>(3)</sup> クーン自身の分析は——「革命」「改宗」などの政治的社会的用語にもかかわらず——自然科学に関するもので社会科学について適用できるか否かは留保されている。自然科学に関しても、既にパラダイムがある分野——この分野の設定の仕方もクーン自身のものは広すぎる<sup>(4)</sup>——についての分析であり、新しい分野の創造は扱われていない。<sup>(5)</sup> また、クーンが描いたのは△アカデミズム科学∨の世界であり、△マンハッタン計画∨に端を発し、現在のNASAの△宇宙開発計画∨に代表される巨大科学・産業化科学には適用できない。<sup>(6)</sup> このように、クーンの見解には限界があり、一層の展開を必要とするものであるが、犯罪学・刑事政策・法学にとっても極めて重要な考え方である。クーンは『構造』においてパラダイムを二通りの用法で使っているとされるが、①形而上学的信念としてのパラダイム、②専門母体（デシプリナ

リー・マトリックス)としてのパラダイム、③見本例としてのパラダイムの三種類に分類できる。<sup>(7)</sup>

二 ここで問題にするのは①の△形而上学的信念としてのパラダイム▽である。これは△世界観▽△世界モデル▽<sup>(8)</sup>とも表現される(これは、「一つの包括的な統合図式の中であらゆるものを理解しようとするいくぶん深遠な世界観——ヴェルトアンシャウング——と混同されてはならない」。それはたとえば、レストランで食事をする人の世界といったものである)。クーン自身は『構造』第二版でこの意味でのパラダイムを否定するが、科学論における認知科学の展開や、解釈学のルネッサンスという状況に位置づけて理解するならば、欠くことのできないものである(ただし、それをパラダイムと呼んだ方が良いかどうかは別である)。

M・ドゥ・メイはAI(人工知能)の短期間の歴史の中で認知科学の展開は「第一に、対象および信号から主体つまり受け手への移動である」。「考察的移動の二つめは、輪郭のはっきりした微小単位を他から切り離して取り扱うことから、大規模な世界モデルにいたるまでのきわめて複合的な実体を取り扱うことへの移動である」として、△生産的な(ジェネリック)図式▽の四段階を区別し、科学論の展開についてもこれらの四段階に対応する四段階が認められるという。これらの諸段階の「垂直方向の統一」が重要であると(下図参照)<sup>(9)</sup>。

知識および情報	AIのパターン認識および知覚	AIの言語処理およびコミュニケーション	科学論
モノド論的	鋳型照合	一語一語の翻訳	実証主義
構造論的	特徴分析	統語論的	論理実証主義
文脈論的	文脈分析	指示的表現	科学の科学
認知論的	総合による分析	世界モデル	パラダイム論

詳細はドウ・メイの前掲書に譲るが、この本の第一部によって若干の説明を加える。

① 「モノド論的観点としての実証主義」にとって世界は現象の総和であり、唯一の究極的実体は現象それ自体である。それぞれの現象はそれ自体で他の現象とは独立に存在する。秩序、統一性、連続性は人間が考案したものである。このようにすべての概念モデルは溶解する。この立場の代表者の一人ピアソンは統計学の創始者であるが、科学知識は注意深く集めた大量のデータに統計的手法を正確に適用して得られるとされる。このような考え方は今日においても大きな影響力を持つ。

② 「論理実証主義——構造論的観点」の科学理論は言語に基づく形式的システムとデータに基づく経験的システムから構成される。「したがって科学理論は、入り組んだ空間的ネットワークになぞらえることができよう。科学理論における語は結び目で表象され、他方、結び目を連結する糸は、一部は定義に、一部は、理論に含まれる基本仮説および派生的仮説に対応する。そのネットワーク全体は、観察という面の上に、いわば浮かんでおり、解釈規則によってその面に固定されている。これら解釈規則はネットワークの一部ではないが、ネットワークの或る部分を観察という面のある特定の場所に結びつけている紐だと考えることができよう。こうした解釈的結合のおかげで、ネットワークは科学理論として機能しうるのである。すなわち、我々は、ある観察データから解釈の紐を通して理論というネットワークの或る点へと上昇し、次に定義や仮説を通して別の点へと進み、その点から別の解釈の紐を通して観察という面まで降りることができるのである」(ヘンペル)。形式的システムと経験的システムの相互作用は仮説—演繹法による。形式的理論や形式的数学体系の研究に参与したが、科学の現場と乖離していたので、特に社会科学においては混乱を生み出した。

③ 「科学の文脈——科学の科学」。科学的知識と前科学的知識の連続性／非連続性、科学発展の自律性／社会的規定性の議論は決着がついていない。「科学を全体的システムとして理解するには、科学の歴史的、哲学的、心理学的、社会学的要素すべてが、どのようにして、孤立してではなくお互いに同時に関連しあつて、作用しあうのかを理解する必要があるのはもちろん、科学がどのようにして存在するかを理解する必要がある」(ミットルフ／キルマン)。しかし、そうした統合的観点は存在しない。

④ 「科学に対する認知的観点——パラダイム」。M・マスターマンは言う。「我々がクーンの結論に対し細部にまでわたつてどれほど文句をつけようとも、クーン以前の地点にまで立ち戻ることができるとは思わない」と。クーン以後、パラダイム探索者(自分の学問分野をパラダイムの探求によって改善しようとする人達)、パラダイム発見(計量書誌学、計量社会学の方法による科学者集団の研究)、パラダイム解剖(パラダイムの構造を研究して認知研究、特に暗黙的な認知的構造を明らかにしようとするもの)が目指されている。

三 解釈学のルネッサンスとは何かを論ずる前に、ここでO・P・ボルノーに基づいて解釈学の基本概念である「理解」について重要なポイントを押さえよう。<sup>(10)</sup>

(1) 認識を無前提的かつ確実に構成しうるはずのアルキメデスの点に到達することを望める道はすべて閉ざされている。認識することはとりもなおさず、そもそも生きるということである。われわれは生まれ落ちた時から、すでにいつでも存在している世界の中に「投げ込まれている」ものとして存在している。どこまで逆上つても、この「すでにいつでも」から抜け出すことはできない。「深く掘り下げれば掘り下げるほど、また過去という黄泉の国へとさらに突き進んで探れば探るほど、人間的なものの発端の基盤は、まったく測り知ることのできないものとし

て示され、たとえどれほど長いこと冒険を冒してそのひもをたぐってみても、私たちの振り下ろす測鉛から、何度繰り返してみても底なしの深淵へと退くのである」(トーマス・マン)。個人の世界理解の根源もまた、人類の系譜の闇の中に見失われるのである。つまり、われわれはこの世界の中で、その都度のある特定の状況の中に、そしてその状況の内部でのある特定の心身状態、特定の気分づけられた状態にある(ハイデッガーの「情態性 Befindlichkeit」である)のだが、いつでも世界を理解しており(「自然的または前科学的な世界理解」)、生を理解している。

(2) 「もろもろの生の関係は私から出て、あらゆる方面へ向かっている。私は他の人間や事物に対して関わりをもつ。……進んで行こうとする方向が決まって、その人の心にゆとりができるとき、彼はこの関係に気づき、感ずるのである。友人は彼にとつて彼自身の生活を高める力であり、家庭の一員はみな、彼の生活の中で特定の場所を占め、彼をめぐるものはすべて、そこに客観化された生および精神として彼に理解される。戸口の前のベンチ、日蔭になる木、家と庭は、生もしくはは精神の客観態としてそれぞれの本質と意義をもつ。こうして生はみな各個人の内から、彼独自の世界を創り出すのである」。「そうして生のこの底層の上に、対象の把握、価値の付与、目標の設定が生の状態のタイプとして……現れる」(デイルタイ)。

(3) 無限の流動的現実の中からどのようにして対象化が生ずるのか。それは指し示す身振りによってである。このような指示によってその対象は、存続している意味関係を離脱し、その他のものは背景に退く。しかし、この指示作用はその対象の物理的実在と結びついている。もし対象が消えた場合には、それを頭の中に保っていることはできない。この指示作用の上に築かれた「精神的な人差し指」(ジャン・パウル)「言葉」は物理的指示作用を

離れて、象徴となる。言語による対象的な知は、状況に結合された境界の理解から解放され、世界をへかく—ある (So—sein) √ において把握されるようになる。「人間は象徴的な宇宙の中で生きているのであって、もはや単に自然的な宇宙の中に生きているのではない。……人間はもはや獣のように、現実との直接的関係をもたない。人間は現実を、いわば面と向かつて見ることはできないのである。この手に触れられない現実、人間の象徴——思考と、象徴——行為が成熟する程度にに応じて、人間から遠ざかるように見える。……人間は……非常に言語的形態や神話的象徴や宗教的儀式の中に生きているので、これら人為的媒体の中間スイッチなしには、何も経験することも見ることもできない」(カッシーラー)。われわれが把握する現実はいつでも、すでに解釈された現実であり、したがって、あらゆる認識はいつでも常に∧解釈の解釈√である。

(4) 明晰で自覚的な理解以前の、理解がまだ展開する以前の∧理解√を∧前理解 (Vorverständnis) √ (ハイデッガー) という。すべての人間の世界概念、すべての知覚、経験などは、前理解によって「いつでも常に照らされ導かれてい」る」と。この共存的前理解 (キュンメル) は認識者自身にとつてさえ、彼が自明的確実性の中で動いている限り、隠されている。しかし、この前理解は閉じられたものではない。われわれが全く新しい経験をすることが可能であることは、前理解が解放されていることの証拠である。経験を導く前理解が、今度は予見不可能な、全く新しい経験に開かれ、依存しているという∧循環√が見られるのである。ここで問題となっている経験は現存する前理解の中へ組み入れることのできる∧小さい経験√ではなく、これまでの前理解の訂正と、新しい把握形態と理解形態の形成を強いる∧大きな経験√である。その時、前理解の解釈は前理解への移行の際に失ってしまう確実性を取り戻すのである。

(5) ガダマーによって若干の補足をしよう。<sup>(11)</sup>

① ハイデッガー以前の循環は全体と部分のそれであり、これはテキストが理解された時には終わる。これに對してハイデッガーの循環は決定的な転回を意味する。ハイデッガーにとって循環とはテキストの理解が∧先行理解 (Vorverstehen) ∨∧∧前理解∨の先行把握によってやむことなく規定されていることであり、全体と部分の循環も理解が完成した時に解消されるものではない。理解とは伝承の運動と解釈者の運動とが互いに中へ働き合うことであり、これを循環という。「われわれのテキスト理解を導くのは、意味の先取りである。この意味の先取りは主観性から生じた行為ではなく、われわれを伝承と結びつけている共通性に規定されている。しかし、この共通性は伝承とわれわれとの関わりの中で絶えず形成される、という仕方では把握される。共通性は単にわれわれが常にすでにその支配を受けているような前提ではない。むしろ、われわれが理解ということをなし、伝承が行われることに関与し、そしてこの関与することを通じてこの伝承を自らさらに進んで規定して行く事によってなされる。「伝承はわれわれにとつては、疎遠さと親密さとの間に位置するものである。その位置は、伝承が歴史的に考えられ、われわれと隔たった対象としてあるという対象性と、或るひとつの伝承へ帰属しているという帰属性 (つまり、理解しようとする者は誰でも、伝承によって言葉になったものとながつており、伝承が伝える伝統と接続しているか、接続を獲得するということ) の∧間 (das Zwischen) ∨である。この『間』に解釈学が位置すべき本来の場所がある」と。

② われわれは状況の中に立っており、いつもすでにある特定の状況の中にある自分を見いだす (ハイデッガーの情態性を想起せよ)。状況という概念には「見ることでできるさまざまな可能性を限界づけるような、ひとつの

立場」、「∧地平(Horizont)∨という概念が本質的に含まれる。地平とは、一点から見えるものすべてを包括し、包囲するような視圏のことである。これを思维的な意識に適用して、地平の狭さとか、地平を拡大しうること、新たな地平を開くこと等々の言い回しをする。とくに、ニーチェとフッサール以来の哲学の用語法では、思惟が自己の有限的な規定性に拘束されていることとか、視圏が一定の規則をもって広がっていることとかを特徴づけるために、この地平という言葉がつかわれた」。

「個人は常にすでに他人と理解しあっているので、個人は決してひとりの個人ではない。これと同様に、ひとつの文化を取り囲んでいるとされるような閉じられた地平もまた、ひとつの抽象である。人間の現存在は一定の立場に決して単純に拘束されておらず、したがってまた本当に閉ざされてしまった地平などをもつことは決してないのである。……むしろ地平とは、われわれがその中へとさまよいつつ入り込むものであり、われわれとともにさまよっていくものである」。

③ 「解釈は、後からたまたま理解が付け加わるような作用なのではない。理解は常に解釈であり、したがって解釈は顕現的なかたちをとった理解である。このような洞察に関連して言えば、解釈に関わる言語と概念規定とはどちらも、理解の内的な構造契機として認識され……言語の問題が、ともかく哲学の中心部へと移動することとなるのである」と。

四 クレーンのパラダイム論、解釈学と極めて近い立場として、マイケル・ポランニーの「暗黙知」について簡単に触れよう。<sup>(12)</sup> 中村雄二郎によれば、「暗黙知の構造」は次のように要約される。「……人相の見分け方や医学的診断のような領域に典型的にみられる能力が暗黙知と呼ばれるのは、その能力は、語りうることより多くのことを知っ

ているからである。そこで暗黙知の構造であるが、それを私たちは次の三項から成る三角形として捉えることができる。第一項とは、要因の細目のことであり、それに対する第二項のほうは、統合化された全体として捉えることができる。また第三項とは、第一項……を第二項……に結びつける個人のことである。「……実際には三項は一体化して働いている」。「まずひと（第三項である個人）は、第一項について知っているが、それは、第二項に注意を向けるためには、第一項について感知（意識）していることを手がかりにせざるをえないからであり、またそのようなものとしてである。これが第一項（要因の細目）と第二項（統合化された全体）との基本的な関係である。そしてこの第一項と第二項の関係は、暗黙知の働きにおいて、第二項を知るためには第一項が手がかりとしてどうしても必要なので、 $\wedge$ 手がかりとそれが示すもの $\vee$ との関係である。……また、第一項と第二項の関係は、感知しながらそこから注意をそらすものと、そこへと注意を向けるものとの関係でもあるので、 $\wedge$ から…… $\wedge\vee$ （from-to）関係とすることができし、さらに、 $\wedge$ から…… $\wedge\vee$ の在り様を考えると、それは身近で基本的なものから遠くの末端的なものへを意味するので、解剖学の術語を使って第一項を $\wedge$ 近接項 $\vee$ ……、第二項を $\wedge$ 遠隔項 $\vee$ ……と呼ぶこともできる」。「……暗黙知におけるひと……が第一項……から第二項……へと注意を向け第一項を第二項と結びつけるときに働く意識（感知力）は、第一項に向けられているものと第二項に向けられるものとは、相異なっている。前者が副次的（「全体従属的」の方がよいと思う——筆者）意識であり、後者が焦点的意識である。この二つは相異なるばかりでなく、それ自体として相容れない。が、前者が第一項に、後者が第二項に対して働くのは同時であり、そのようなものとして重なり合っている。そして暗黙知のなかで焦点的意識が間違つて第一項……のほうに向けられることがあると、たちまち第二項……が解体し、暗黙知は破綻してしまう<sup>13)</sup>と。

「わたしたちの暗黙的能力が経験に対する知的支配を獲得するように経験を再組織することによってその能力の成果を達成する……」。「こうした働きをすべて網羅する言葉は、端的にいえば、『理解』「Understanding」である」。「理解」というものを知の妥当な形態としてわたしたちが承認することは、わたしたちの精神をこの暴力的で無能な専制（「経験主義が行った人間の経験の残酷な切斷」をいう——筆者）から解放するのに大いに役立つであろう」。「……生物学と医学の事実、問題になっている対象を吟味するための特殊な技能と特有の標本を同定するための特殊な鑑識能力の双方を専門家が有していることによって始めて一般に認められる。そのような技法を働かせるのは、陽表的（*explicit*）の詠語——筆者）諸規則ではいつになっても完全には特定されることのできないような、知性の暗黙的妙技である」。「地図とか、グラフとか、本とか、公式とか、そのほかこうしたものは、わたしたちの知識をたえず新しい観点から再組織するすばらしい機会を提供している。そして、この再組織は、それ自体、原則として、暗黙的遂行であり、ちょうどそれによってわたしたちが前・言語的水準で……自分たちの周囲の状況の知的支配を手に入れるようなことと同様であり、それゆえ新しい発見を行う創造的再組織の過程とも類似している」。「このようにしてわたしたちは、人間の暗黙的能力の優位を少しも損じることなく、分節化のもつとてつもない知的利点を結局は説明することができる。動物を越える人間の知的卓越が依然として人間の記号使用に負っているにもかかわらず、この利用それ自体——さまざまな主題を指示する諸記号によってそうした主題を累積し、熟考し、再考すること——は、いまは暗黙的、無・批判的過程であるように思われる」。「わたしたちの分節化した素養全体が、結局はたんに道具箱にすぎず、わたしたちの分節化されない専門的能力を展開する優れて効果ある用具であることがわかる。さらにまた、わたしたちは、知識の暗黙的、個人的（むしろ「人格的」の方がよいと思う。Dor-

sonal」の訳語であるが、ポランニーの造語であり、「パーソナル」としか訳せない言葉である——筆者）共働が陽表的知識の領域でも幅をきかせており、あらゆる水準で知識を獲得し、保持するための人間の究極の専門的能力を表している、と結論するのをためらう必要はない」と。<sup>(14)</sup>

五 以上述べた解釈学に基づいた批判理論が〈実証主義論争〉において社会科学に関して展開した問題——方法の無人称的な公共化と外在する批判的理性に対する批判——は自然科学においても妥当するのである。これを解釈学におけるルネッサンスと呼ぶのである。

(1) 以下に述べる河本英夫の主張は全く妥当なものである。<sup>(15)</sup>「方法や理論の実践的な『適応』に際しては、使用される理論や概念が対象に対して外的なままにとどまってはならないのだとすれば、適用される対象の構造があらかじめ先行的に了解されていなければならない。科学者は、前科学的、前方法的に蓄積された経験を通じてこの構造について非頭在的な仕方であらかじめ理解し、対象を理論適合的なものとして分節し選択してしまっているのである。この前方法的経験とその中で先行的に理解されている総体性を顕在化しそれとして取り出すのが〈意味の解釈学的解明〉に他ならない。この先行的了解は、対象の先取りという発見的な意味のみをもつのではない。……この先行的理解こそ、かえって対象に関して解明された科学の成果の意義を規定するのだから、方法論や理論に対して同時に構成的な意味をも有するのである」。「しかも同時に、この経験は制御された操作可能な方法をもって対象への接近を可能にするだけではない。日常言語的な意思疎通によって、あるいは前方法的に共有された経験によって科学者間の対話や討議を可能にもしているのである。『パラダイムは、ある集団の成員によって共通して持たれる信念、価値、テクニクなどの全体的構成を示す』ものであるし、解釈学において了解は、対話という

間主観的過程と歴史を通じた媒介の中において生起するものである」と。

(2) このように科学的探求にとって解釈学的経験は避けることのできないものであるが、更に科学論の基礎概念である「帰納」/「確証」/「反証」/「説明」なども再解釈をうけねばならない。河本は言う。「例えば『説明』はヘンベル・オッペンハイマー・テーゼに見られるように……主として説明項から被説明項を導出する『演繹』のプロセスが科学的説明を構成するものとされた。……しかし現実的な科学の探求においては『説明』は、科学者間の討議において機能するのであるから、むしろ討議の構造が『説明』の意味を解明する。説明は対話的行為として『誰か』が『誰れか』に『何か』を『説明する』すること以外ではないのである」。「したがって『説明』とは、『事態』と(その事態に対する)期待地平の関係の変化を惹き起こすもの」であり、事態へのわれわれの見方か、われわれの理論が変更されるのである」。この場合には、既存の理論への包摂が不可能な場合であり、相互承認を目的とする相互行為が行われる。かくて、二種類の経験が区別される。「技術的に制御されるシステムにおいて、独自の遂行される分析的操作方法によって構成される経験と、方法的研究に先立って先行的にそこへと巻き込まれ、伝統によって方向づけられた経験とがある」。△独立の自然▽というイデオロギーとそれに基づく主観—客観の二元論、システム化した方法論の外に留まる独我論的研究主体は維持できないのであると。

(3) 更に河本はポストパラダイム科学論の課題として次のように締めくくる。「……科学者が一般に知の根拠への問や知識の基礎への考察を課題とするものであるなら、社会化された歴史的作用連関の解明のみならず、同時に根拠連関としての解明もなされなければならないはずである」。「……ここで基礎づけ要求というのは、普遍的、絶対的な根拠を求めようというものではない。知の体系に内在的な前提をひき出し、膨大な応用事例の蓄積のもとに

隠されているそうした前提を解明すること、そして同時にそれらが、歴史的、社会的な人間の間主体的相互行為によって形成されてきたものであることを明示することが、ここでの基礎づけ要求に含意されているところである」。

「……討議連関においては方法論的に制約された機能的討議と、理論形成や自己反省を介した批判的討議は厳密に区別されねばならない。……批判的討議は、実現されるべきもの、したがって行為目的に関わっており、この対話的——意思疎通的行為において実現されるべき目的が『言表の妥当性の意味』を規定している。それ故また、目指されるべき目的は真理の意味を——真理の実現ではない——規定しているのであって、真理の合意説は、対話において実現されるべき『目標』に対してのみその意味を得るのである」と。

## Ⅱ 戦後における状況の転換と批判——危機理論

一 長年にわたって依拠して来たパラダイムを捨てて新たなパラダイムを採用するに至るには、余程の決定的な出来事がなければならぬ。既定のパラダイムに習熟すればする程、このパラダイムでは説明できない事例が分かるようになる。なんとかして既定のパラダイムで説明に努める。しかし、そのような変則事例が積み重なって来ると、普通とは違う状態となり、そこで新しいパラダイムが出て来て、△科学革命▽が起きる。これがクーンの筋書であるが、△通常科学▽の分析の素晴らしさに比べて、あまりにも図式的である。クーン自身が引用するブルンナーとポストマンの実験（赤いスピードの6のカードと、黒いハートの4のカードを使ったもの）によると、初めは異

常に気がつかない(つまり、黒いスピード・赤いハートのカードと想っている)、すこし経つと変則に気づいて、困惑する。しかし、時間が過ぎると赤いスピード・黒いハートのカードはするように認識されるが、そのためにカード遊びの性質についての理論は全く変更されないのである。科学研究の場合にも、ある人は変則に気がつかない、ある人は変則だとは思わない、変則だとは思っても既定のパラダイムを捨てる人は少数であるのが普通である。どのようにして「科学革命」が起きるのか。ここところが、クーンの仕事の残された部分である。

二 この点に関してはアルヴィン・グールドナーの考え方が説得的である。<sup>(17)</sup>グールドナーはいう。「……社会理論はすくなくともふたつの仕方、そしてまたふたつの理由で、変化する。まず第一に、それは「内的」に、つまり技術的な発展や精巧化を通して変化し、これは社会理論がもちうる有意性や意思決定の明確な規則に準拠する。第二に、社会理論はそれが投錨されている下部構造が変化することによって変わることがある。つまりそれは感情の変化や領域仮説の変化、それに理論家やかれをとりまく人びとの個人的現実の変化などに媒介された、社会構造や文化構造の変化の結果変わることがある」と。<sup>(18)</sup>ここで「領域仮説 (domain assumptions)」とは、人間と社会に関する一般的な仮説をいい、「感情」(感情構造 (structure of sentiments)) といふ表現の方が良い——筆者)とは、例えば、世代の断絶現象に見られるように、特定の領域仮説、世代、集団、個人などの周りの組織された感情の構造をいい、個人的現実とは個人またはその個人を構成員とする集団の経験によって強弱をつけられた現実のとらえ方である。<sup>(19)</sup>

グールドナーは社会理論の下部構造の三構成要素のうち、新左翼の登場や若者の対抗文化の事例の説明において、変化の引き金としての感情構造を重視する。<sup>(20)</sup>わたしは更に、個人的現実、わたしの言い方では「原体験」も重要で

あると思う。社会理論の基本的パラダイムの変化の主要な原因は、その理論が下部構造と調和しなくなることである。このような不調和は第一に、それらの理論が形式的ないし技術的に精緻化され、発展した結果、それまで理論を支えていた下部構造との接点を失ったり、対立したりする場合である。人々はその理論が事実をありのままに語っていない、バカバカしい程に説得力を欠いている、不快であると思う。第二には、下部構造の諸要素の方が変化しただために——反証する証拠がまったく存在しない時にも——既存の理論が不適切で、不条理で、おもしろくなく、また明らかに誤っていると思われる場合である。既存の理論の下部構造を身につけた人々との間で争いとなる。<sup>(21)</sup> グールドナーはクーンを引用していないが、以上述べたように、極めて似た主張であるといえる。

三 社会理論の下部構造の変化はどのようにして起こるのだろうか。R・D・レインが言うように、我々の物の考え方・行動は、我々の経験の函数であるから<sup>(22)</sup>（感情の構造についてもそうである）、 $\wedge$ 原体験 $\vee$ が最も重要であるように思われる。それまでの社会化過程の中で身につけて来た $\wedge$ 領域仮説 $\vee$  $\wedge$ 感情構造 $\vee$  $\wedge$ 個人的現実 $\vee$ が、そのような $\wedge$ 原体験 $\vee$ によって変化するのである。すなわち、この $\wedge$ 原体験 $\vee$ は体験者が身につけている、これら下部構造の諸要素の変更を迫るものであるから、それは $\wedge$ 危機 $\vee$ という性格をもつ。社会理論の場合には人間と社会に関する物の考え方が問題となっているのであるから、個人と集団の両アイデンティティに関わるもの、すなわち、個人と集団の存立の基底に関わるものだからである。ここに $\wedge$ 批判理論 $\vee$ の $\wedge$ 危機理論性 $\vee$ の根拠がある。パラダイム転換に至る程の危機状況の下で生まれる新しい理論は、既定の理論に対する根本的な批判理論であり、必然的に危機理論でもあるのである。特に社会理論の場合には、グールドナーが述べているように、社会的文化的激動に促されて理論の下部構造が変わるのであるから、このような激動を体験した者には危機理論性は自明なのである。

ここで注意すべきは、ユルゲン・ハーバーマスの指摘である。「危機イデオロギーを真正正銘の危機経験から区別する」ために、社会危機をもっぱら意識現象のみと結びつけるべきではない。同時代人の危機意識が後で誤りであったとされることがある。「社会」というものは、その成員たちが危機を唱えるときにだけ危機に陥るわけではなく、またそのときには必ず危機に陥るといってもいい。しかしながら、「学問以前の言葉づかいが教えるところによれば、主体のみが危機に巻きこまれるのである。社会成員が構造変化を存立危機として経験し、それによって彼らの社会的自己確認が脅かされたと感じるときにのみ、われわれは危機という言い方をする事ができる。体制統合（システム統合——筆者）にとつての障害は、社会統合を脅かすかぎりでのみ、その存立を脅かす危機となる。すなわち、規範的諸構造に対する合意の基礎が甚だしくそなわれて社会がアノミー状態に陥るときにのみ、それらの障害が存立を脅かす危機となる。危機状態は、社会的諸制度の分解という形をとるのである」と。<sup>(23)</sup>

グールドナーの理論の下部構造は解釈学という「前理解」に当たる。したがって、ここでグールドナーが指摘している事態は、「前理解」そのものが維持できず、あるいは解体に至る事態なのである。われわれの個人としての、あるいは集団としてのアイデンティティが脅かされている事態、更には、われわれの日常生活を支える社会的文化的構造の中軸を占める役割体系と社会的文化的制度の崩壊。円滑な日常生活を支えている前言語的基盤と人間の分節的知の下部構造の崩壊、そして世界認識の解体に至るそれによって惹き起こされる事態は決定的な危機である。<sup>(24)</sup>

四 どのような事態が危機状況を構成する事態とされているのだろうか。概括的に言えば、ハーバーマスが巧みに総括するように、晚期資本主義体制の根本矛盾は「他の条件が同じならば——(a)経済システムが必要規模の消費

可能な商品を生産しえなくなるか、(b)行政システムが必要規模の合理的決定を策定しないか、(c)正当化システムが必要規模の一般化された動議づけを調達しないか、(d)社会文化システムが必要規模の、行動を動機づける意味を生させないか<sup>(25)</sup>である。

具体的に指摘されているところでは、行政国家―官僚制の確立、福祉国家的政策の展開、高度産業―技術社会の到来、労働の質的变化、これらによってもたらされた現代人の日常意識の変化（「故郷喪失者たち」）である。更に、ハーバーマスは既に一九七三年の段階で、晚期資本主義が「世界社会」にもたらす「生態学的・人間学的・国際的均衡」の危機について述べている。<sup>(26)</sup>紙数がないので概略を述べる。

(1) 自由主義的資本主義においては国家は①ブルジョア的な民法的交渉の保護（警察と司法）、②自壞的副次効果にそなえて市場メカニズムを防衛する保障（たとえば、労働者保護立法）、③総経済的な生産の前提条件（公的学校教育、輸送、交通）の充実、④蓄積過程から生じるさまざまな必要に私法体系を適合させること（税法、銀行法、企業法）だけを行えば良い。ところが晚期資本主義においては、これらが大規模に、一層有効に行うと共に、特に、⑤市場機能の間隙に立ち入って支援すること（たとえば、非生産的使用財の国家需要、科学技術の進歩の国家的組織化など）、⑥蓄積過程に介入し、政治的に耐えられない費用を補償すること（環境対策費、農業などの存続保障、労働者の社会的地位の改善など）をも行わねばならない。しかし、国家は結局は、経済活動と利潤率の低下を埋め合わせることができない。

(2) 国家財政は世界的市場戦略の費用と非生産的使用財（軍備と宇宙開発）の費用、直接に生産にかかわる基盤構造のサーヴィスの費用（交通通信体系、科学技術の進展、職業教育）、間接に生産にかかわる社会消費の費用（住

宅、交通、保健、余暇、教養、社会保険)、非労働人口(児童・生徒・学生、失業者、金利生活者、福祉受給者、職業化されない主婦、病人、受刑者など)の費用、更に環境対策の費用を負担しなければならない。これらは結局、税金によるから、①国家は必要な税金を確保し、可処分税金を合理的に活用して、危機的な成長障害を回避しなければならぬ。この点で失敗すると、△合理性の危機▽が生じることになる。②他方で租税の選別的徴収、その活用の明確な優先モデル、行政的給付によって国民の合意を動員できなければならぬ。この点で失敗すると、△正統性の危機▽が生じることになる。

(3) 国家は文化システムをそう簡単には演出できず、むしろ国家的計画分野の膨張は、これまでは当然自明とされていた事柄をも問題化する。△意味▽は稀少資源であり、これがますます稀少になって行く。それゆえに国家財政に徴収された△価値▽という資源が△意味▽という稀少資源に代わらなければならない。正統化の欠如は、体制に即した報酬によって埋め合わされねばならない。体制に即した報酬への請求が可処分価値量よりも急速に上昇するとき(ガルブレイスの言う△私的富対公共的貧困▽)、あるいは、体制に即した報酬では満たすことのできない期待が生ずるやいなや、正統化の危機が発生するのである。

(4) 動機づけの危機は社会文化システムそのものにおける変化にともなって生ずる。晚期資本主義においては、動機づけの危機の前兆が文化的伝統(道德体系、世界像)の次元でも、教育体系(学校と家庭、マス・メディア)の構造変化の次元でも浮かび上がる。自由主義的資本主義の時代に国家や社会的労働システムが頼りにしていた伝統の備蓄は底をつき、ブルジョア・イデオロギーの中核部分は疑わしく(私生活志向)、残存部分(科学信仰、アウラなき後の芸術、普遍主義的価値体系)は機能不全に陥っている。晚期資本主義は、みずから充足しえない△新

しい√欲求を生み出すのである。<sup>(27)</sup>

(5) 労働の質的变化とは何か。まず、初期資本主義の下ではミシェル・フーコーが言うように、生産を保障するために労働者を規律しなければならなかったが、自動化されたテクノロジの発展に伴って、労働者は機械操縦者から機械の部品となった。さらに高度産業社会においては、「新しい統制システムの下では服従が生み出される地形は工場の外に移行する——門戸は最終的にパノプティコンに対して閉じられた——そして市場の外に移り……両者の間の新たな関係へと移った。つまり、労働過程における服従の見返りとして市場における利得、労働の代価の取引という関係へと移るのである」と。<sup>(28)</sup>

(6) 高度産業∥技術社会の到来については省略するが、それらがもたらす現代人の日常意識についてはバーガー／バーガー／ケルナーが指摘している。すなわち、テクノロジと官僚制が「現代化」の第一義的な担い手である。テクノロジと共存するものとしては、部品性、構成要素と順次要素との相互関係、手段と目的の分離可能性、労働の生活からの分離、匿名的社会関係、自己匿名化と部品化された自我、多元的關係、疎外であり、官僚制と共存するものとしては秩序正しさ、分類癖、一般的で自律的な組織化能力、予測可能性、非個人的評定に基づく正義の一般的期待、手段と目的の非分離性、道徳化された匿名性、明白な抽象性である。バーガー等はこれらの現代の普通の人々の日常生活を、安住の地を失った△故郷喪失者 (homeless mind) △とよぶのである。<sup>(29)</sup>

## 結びにかえて

二〇世紀の世紀末に当たって、難問山積の現在、ディシプリンの鞘壺の中で白昼夢に耽けている時間的余裕はない。個人的な脱出口だけを求めることは無益であろう。<sup>(30)</sup> いわく内発的発展論、共生社会論、自然の共同体、理想的対話状況。たとえ実現がいかに困難であろうと、目指す方向は共通しているように見えないであろうか。<sup>(31)</sup>

## 注

## I

- (1) トーマス・クーン (中山茂訳) 『科学革命の構造』、一九七〇年。クーン (安孫子||佐野訳) 『本質的緊張』 一—二卷、一九九二年。
- (2) 中山茂 『歴史としての学問』、一九七三年。
- (3) 以下については、Barry Barnes, T. S. Kuhn and Social Science, 1982.
- (4) 塚原修一 「専門分野の形成とパラダイム」中山茂編著 『パラダイム再考』、一九八四年、二五三頁以下。
- (5) 塚原・同論文、参照。
- (6) 吉岡斉 「巨大科学とパラダイム——社会的動因によるパラダイム転換について」中山編著・同書、三〇〇頁以下。J・

R・ラベッツ（中山他訳）『批判的科学——産業化科学の批判のために』、一九七七年参照。

- (7) M・マスターマン「パラダイムの本質」I・ラカトス/A・マスグレーブ（森博監訳）『批判と知識の成長』、一九八五年所収。②について、クーンは「補章——一九六九年」においてディシプリナリー・マトリックス（この方が「専門母体」よりも良いと思う）を「集団の立場の構成としてのパラダイム」、つまり、「特定の専門領域の研究者が共通して持っていること」であるとしている（しかし、この用語の説明には賛成できない）。この「特定の専門領域」とは、例えば生物学というディシプリン全体ではなく、生物学におけるフーージ研究者の集団である。この集団がその領域での目標、基準、問題、方法、成果の認知、研究の指導、情報伝達の便宜、後継者の養成、態度、報酬、価値などを規定するのである。③の原語は“exemplar”である。日々の研究を導くのは、この「見本例」、すなわち、特定の専門領域の標準的教科書である。三つのレベルのパラダイムは入子構造を形づくっており、下位のレベルのものが一つ上位のレベルのものを方向づける力を及ぼすことができる。しかし、上位から下位への反作用もある。

(8) M・ドウ・メイ（村上／成定／杉山／小林訳）『認知科学とパラダイム』、一九九一年、第二章。

(9) M・ドウ・メイ・同書、二四—二七、五四頁以下。

(10) O・P・ボルノー（西村／井上訳）『認識の哲学』、一九七五年。同（西村／森田訳）『真理の二重の顔』、一九七八年。紙数の制限のために、いちいち頁数を挙げていない。

(11) H・G・ガダマー（池上／山本訳）『真理と方法』O・ペグラー編『解釈学の根本問題』、一九七八年、一七一—二二七頁。

(12) マイケル・ポランニー（長尾史朗訳）『個人的知識』、一九八五（一九五八）年。同（沢田／立山／吉田訳）『人間の研究』、一九八六（一九五八）年。同（佐藤敬三訳）『暗黙知の次元』、一九八〇（一九六六）年。同（佐野／沢田／吉田監訳）『知

と存在」、一九八五(一九六九)年。『特集Ⅱマイケル・ポランニー——暗黙知の思考』現代思想一九八六年三月号。

- (13) 中村雄二郎「〈暗黙知〉と〈共通感覚〉——マイケル・ポランニー読解序説」前掲現代思想一九八六年三月号五八頁以下。「暗黙」は'tacit'の訳語。

- (14) ポランニー「人間の研究」一六一—二四頁。

- (15) 河本英夫「ポストパラダイム科学論——その批判的継承と課題」中山編著・同書一八三—二二三頁。了解は理解と同義。

## II

- (16) 初版による邦訳にはない。第二版で引用されている(B. Barnes, op. cit. p. 99)。

- (17) A・W・グールドナー(岡田/田中、矢沢/矢沢、栗原/瀬田/杉山/山口訳)『社会学の再生を求めて』(原題 *The Coming Crisis of Western Sociology*)、第一—三巻、昭和四九—五〇年。

- (18) グールドナー・同書、第三巻、七七頁。

- (19) グールドナー・同書、第一巻、三六一—五八頁。

- (20) グールドナー・同書、第三巻、八〇—九六頁。同旨 Fritz Sack, "Definition von Kriminalität als politisches Handeln: der labeling approach", in: Arbeitskreis Junger Kriminologen (Hrsg.), *Kritische Kriminologie*, 1974, Anm. 17 at S. 42. イギリスの

劇評家レイモンド・ウィリアムズは言う。ある意味においては、「感情の構造 (structure of feeling)」はある時代の文化である。一般的な組織におけるあらゆる要素の特定の生ける結果である。この点である時代の芸術は特徴的なアプローチ・調子を含めて、極めて重要である。それは、ここにはこれらの諸特徴が意識的ではなくとも、我々が記録する事例において、本当の当時の感じ、深いコミュニティが自然に記されているからである。それはコミュニケーションを可能に

するものであるから、すべての本当のコミュニティにおいては、非常に深く、広く共有されている。「感情の構造」は  
 いかなる公式的な意味においても学ぶことはできない。ある世代はその後継者に対して社会的性格または一般的な文化的  
 パターンの訓練に成功するかもしれないが、新しい世代はどこからともなく、新しい固有の感情の構造を持つ。新しい世  
 代は先行世代を承継しつつ、生活全体を確かに違っていて感じており、その創造的反応を新しい感情の構造へと形成するの  
 である (Raymond Williams, *The Long Revolution*, 1961, pp. 48-9)。

(21) グールドナー・同書、第三巻、七八—八〇、八七—九〇頁。

(22) R・D・レイン (笠原/塚本訳) 『経験の政治学』、一九七三年、一一—四三頁。

(23) ユルゲン・ハバーマス (細谷貞雄訳) 『晚期資本主義における正統性の諸問題』 (以下「諸問題」で引用)、一九七九年、  
 五—七頁。客観的危機状態ではなく、危機意識が果たす役割については Smaus, *Das Strafrecht und die Kriminalität in der  
 Alltagsprache der deutschen Bevölkerung*, 1985, SS. 9, 117ff. 140ff. 新しいパラダイムを自覚的に提起するものとして J・  
 I・キッセ/M・B・スペクター (村上/中河/鮎川/森訳) 『社会問題の構築——ラベリング理論をこえて』、一九九〇  
 年。

(24) ハーバーマスの〈前理解〉は「認識関心」である (ハーバーマス (奥山/八木/渡辺訳) 『認識と関心』、一九八一年)。  
 参照、アクセル・ホネット (河上倫逸監訳) 『権力の批判——批判的社会理論の新たな地平』、一九九二年。〈批判〉と〈危  
 機〉が語幹を同じくすること、根本的批判理論は危機理論であることについては、ハーバーマス (細谷訳) 『理論と実践  
 ——社会哲学論集』、一九七五年、二七—二八四頁。R. Koselleck, *Kritik und Krise*, 1961, Anm. 154 und 155 at SS.  
 189—191. 犯罪・非行や性的逸脱という個人的社会的現象が〈帝国の危機〉を表すものに格上げされることについて、D.  
 Garland, *Punishment and Welfare*, 1985 (紹介、小野坂・法政理論二二巻一号)。

- (25) ハーバース・前掲『諸問題』、七八頁。
- (26) ハーバース・前掲『諸問題』、六四—七一頁。
- (27) 以上についてハーバース・前掲『諸問題』、三三—三四、五一—四九頁。ハーバースは各種の危機の諸学説・諸理論について述べているが、概略として要約した。
- (28) J. Lea, 'Discipline and capitalist development', in: B. Fine et al. (ed.), *Capitalism and the Rule of Law*, 1979, p. 87.
- (29) P・L・バーガー／B・バーガー／H・ケルナー(高山／馬場／馬場訳)『故郷喪失者たち——近代化と日常意識』、一九七七年、第一—二章。高度産業社会の今日の日本にとって、やはり「近代」ではなく、「現代」というべきなので、あえて「現代」とした。
- (30) Cf. S. Cohen/L. Taylor, *Escape Attempts—The Theory and Practice of Resistance to Everyday Life*, 1976.
- (31) 鶴見／川田編『内発的發展論』、一九八九年。谷本寛治「社会システムのリコンストラクション」思想一九九一年六月号、M・マルヤマ「文化的共生をめざして」現代思想一九八四年一月号。C・ベイ(内山／丸山訳)『解放の政治学』、一九八七年。J・ハーバース(三島／巒田／木前／大貫訳)『近代の哲学的ディスクールⅡ』、一九九〇年、一一—一二章。